

# モモせん孔細菌病防除マニュアル

山梨県・JA全農やまなし  
JAフルーツ山梨・JAふえふき・JA山梨みらい・JA南アルプス市・JA梨北・加納果実農協

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
枝で潜伏越冬する			気温が上昇すると病斑をつくり風雨によって細菌の感染が広がる			梅雨期に発生盛期となる			盛夏期には一時感染は停滞する		
春防除			生育期防除			秋防除					


### 春防除(薬剤防除)

- 風雨により感染が拡大する可能性が高いため、防除は降雨前に必ず行う。

※( )は100g当りの薬量

散布時期	防除薬剤	注 意 点
花弁が見え始める頃 (3月中下旬)	ICボルドー 412 30倍(3.3kg) 又は 4-12式ボルドー液	●住宅隣接園では、ムッシュボルドー DF 500倍(200g)を用いる。

※ 石灰硫黄合剤散布後2週間以上あける。  
※ ネクタリンでは、ICボルドー412又はムッシュボルドーDFを用いる。  
※ 薬液が樹全体にかかるよう10g/当り400g散布する。  
※ せん孔細菌病防除は、地域ごと一斉防除を行う。



花弁が見え始める頃

### 生育期防除(薬剤防除)

- 発病してからの防除効果は期待出来ないため、**予防散布**に努める。
- 防除は、枝病斑等を除去し、できる限り降雨前に行う。

散布時期	早生種 (日川白鳳まで)	中生種	晩生種
満開直後	アグレット液剤・水和剤		
4月下旬	マイコシールド	アグレット液剤・水和剤	
5月上旬	マイコシールド		
5月中旬	—	—	マイコシールド

※ アグレット剤は黒核果を生ずるため新緑のぶどうにからさないように注意する。また、おとうらの隣接園では用いない。その他の果樹も鳥獣に注意する。  
※ 低温、高湿度が続く場合は追加防除(別表参照)する(但し、収穫前日数には注意する)。  
※ 薬液が樹全体にかかるよう十分量を散布する。

### 別表 せん孔細菌病防除剤

散布時期	薬剤名	剤形	散布回数	収穫前日数	使用回数	100g当りの薬量
満開直後	アグレット液剤	1,000倍	60日前まで	60日前まで	2回	100cc
	アグレット水和剤	1,000倍	60日前まで			
満開直後から ※以降7~10日隔	マイコシールド	1,500倍	21日前まで	5回	5回	66g
	バリダシ液剤5	500倍	7日前まで	4回	4回	200cc

※ ネクタリンでは、マイコシールドを用いる(収穫28日前まで/5回以内)。  
※ アグレット剤・マイコシールドを優先的に用いる(但し、収穫前日数には注意する)。  
※ 薬液が樹全体にかかるよう十分量を散布する。

### 秋防除(薬剤防除)

- 秋季防除により越冬する細菌の枝への感染を防ぐ。
- カイガラムシ類等の防除も含む。

※( )は100g当りの薬量

散布時期	防除薬剤	注 意 点
9月上旬	スプラサイド水剤1,500倍(66g)	●カイガラムシ類の多い場合は、アブロード FL 1,000倍(100cc)を用いる。

約7日以上はあける

散布時期	防除薬剤	注 意 点
9月中旬	ICボルドー 412 30倍(3.3kg) 又は 4-12式ボルドー液	●住宅隣接園では、ムッシュボルドーDF 500倍(200g)加用クレフノン 100倍(1kg)を用いる。但し、高温時の散布は避ける(葉害)。 ●スミチオン水和剤40 1,000倍(100g)を加用してもよい。

約2週間後

散布時期	防除薬剤	注 意 点
10月上旬	ICボルドー 412 30倍(3.3kg) 又は 4-12式ボルドー液	●住宅隣接園では、ムッシュボルドーDF 500倍(200g)加用クレフノン 100倍(1kg)を用いる。但し、高温時の散布は避ける(葉害)。

約2週間後

10月上旬の防除後、落葉が遅い場合や台風が接近する恐れがある場合は、ICボルドー 412 30倍(3.3kg)又は4-12式ボルドー液を追加散布する。住宅隣接園ではムッシュボルドーDF 500倍(200g)加用クレフノン 100倍(1kg)を用いる。ただし、甚大な被害がでた地域は、2週間隔で3回散布する。

※ ネクタリンでは、ICボルドー412又はムッシュボルドーDFを用いる。  
※ 病原菌は、強風に伴う雨で広く拡散するため、台風の接近や前線に伴う雨の前に防除を行う。  
※ 薬液が樹全体にかかるよう10g/当り500g以上散布する。  
※ せん孔細菌病防除は、地域ごと一斉防除を行う。  
※ 苗木にも、丁寧に散布する。


### 発生が多くなる条件

- ① 生育期(4~6月)に強風雨が多い年
- ② 風当たりの強い園
- ③ 台風が来襲した翌年
- ④ 春の高温、夏の低温、6~8月が多雨の年
- ⑤ 若木や密生過多で樹勢の強い樹  
(新梢が遅くまで伸び、充実が悪いため感染しやすい)
- ⑥ 川沿いの砂地の園  
(砂地園では乾湿の差が激しく、肥料の効き方が急激になり軟弱な生育となりやすい)
- ⑦ 秋に二次伸長が多かった年


○ 難防除病害のため「薬剤防除」+「耕種防除」により菌密度を下げる対策が必要である。

### 病原菌 Xanthomonas arboricola pv. pruni 他(細菌)


- 病原細菌が繁殖できる温度は、10~35℃。適温は、25℃。
- 病原細菌は、雨水に混じって分散する。自ら移動し侵入することが出来ず、風を伴う雨があると気孔や傷口から侵入する。




芽枯れ、枝枯れ




春型枝病斑  
(スプリングキャンカー)



葉の病斑



幼果の病斑



果実の被害果

- 開花期前後から芽枯れや枝枯れがみられる。
- このような枝から葉、幼果へ感染する。
- 枯れ枝は見つけ次第取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する(せん除は、枝ごと行い、できる限り降雨前に行う)。

- 4~5月に降雨が多く気温が高いと、春型枝病斑(スプリングキャンカー)が多くなり、せん孔細菌病が多発する。
- 春型枝病斑(スプリングキャンカー)は、1ヶ月間程度は伝染源となるので、見つけ次第せん除する。
- 若葉ほど感染しやすいので、葉芽先行で生育する年には防除が遅れないように注意する。
- 葉の潜伏期間は4~9日。

- 芽が枯れている枝、蕾が膨らまず展葉が遅い生育不良枝等は、せん孔細菌病に感染している恐れがあるので、結果枝ごとせん除する。

- 新梢に感染し、発病すると夏型枝病斑(サマーキャンカー)を形成する。
- 被害果は伝染源となるので見つけ次第取り除き、ほ場外へ持ち出す(有袋品種では、除袋時に被害果は取り除く)。

- せん孔細菌病防除は、地域ごと一斉防除を行う。

- 秋季防除の前に、夏型枝病斑(サマーキャンカー)のせん除を徹底する(雨の日や枝葉が濡れている時は避ける)。せん除した枝等は放置せず、必ず園外に持ち出し処分する。
- 落葉して乾いていない葉柄痕等から、細菌が侵入し感染するので落葉前迄の防除が重要。

### 生育期防除(耕種防除)

- 枝病斑、発病葉、発病幼果は、伝染源となるので見つけ次第取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 幼果の感染予防として、生理落果の少ない品種では、早めに袋掛けを行う。なお、春型枝病斑(スプリングキャンカー)が多く、発生が心配される場合は、極早生種・早生種でも可能な限り有袋栽培を行う。
- スプリングクラッシュ水によって葉や枝に直接水滴が当たると、傷口が出来たり、水滴により病原細菌が侵入する恐れがあるため注意する。
- 潅水するほ場では、樹勢の衰弱がおきるだけでなく、湿度が高まり病原細菌が繁殖しやすくなる。特に、ほ場が長時間潅水すると、葉の気孔が開き、急激に感染が拡大する恐れがあるので、ほ場内の排水対策の徹底及び土壌改良に努める。

### 収穫後(耕種防除)

- 密植園では、薬剤の散布ムラがおこり、防除効果の低下を招く恐れがあるので間伐、縮伐を行う。
- 収穫時期の異なる品種同士の混植園では、生育期に効果の高い体系防除が困難になるため、そのような混植は出来るだけ避ける。
- 秋季剪定時に発病枝や発病葉をせん除し、ほ場外へ持ち出す。
- 秋季剪定により、樹冠内部にまで薬液がかかるように徒長枝等をせん除する。

### 剪定の注意点

- 枝病斑が見られた結果枝を優先的にせん除する(病斑枝は、ほ場外へ持ち出し処分する)。
- 本病は、開花期頃から芽枯れ枝や生育不良の枝なども見られ、春先にもせん除する可能性もあるので、剪定時には通常よりも結果枝を1~2割多く残しておく。
- 内肉枝を多く残すと、散布ムラとなり病害発生が増える恐れがあるので、できる限りせん除する。

安全・安心な農産物の生産に心がけましょう <農薬安全使用の厳守・農薬飛散防止・防除日誌の記帳>